ON THE ROAD 青山繁晴の道すがらエッセイ
その後の「ぼくらの祖国」… and the Evening Star

（２０１１年１２月２５日）より一部抜粋

▼さて、最新刊の「ぼくらの祖国」は、版元である扶桑社の編集者によると、予約されたかたが予想を超えて多くて、初版本はすぐになくなるのではないか、という情勢だそうです。

そこで、１月にすぐ、重版が出せるように、作業をしておくことになりました。

まず、北朝鮮の金正日総書記の死去を受けて、「重版のためのあとがき」を書きました。

初版のための原稿をすべて書き終わったあとに、この「アジア史に残る死」が起きましたから。

そのあと版元から、初版本のゲラが、どさっと届きました。

というのは、あの４週間を超えてほとんど眠らずにサンフランシスコで原稿の仕上げを急いだ日々に、ゲラのチェックは一度しからやることができず、出版社の校正を信頼するほかなかったからです。

もちろん、出版社の校正のかたがたはプロの誇りを持って仕事をしてくれたのですが、著者による校正は本来のぼくの考え方でも、一度では足りません。

そこで重版に向けて、全ページをもう一度、著者の手で校正することにしたのです。

ところが１月の重版ということは、年末年始に出版社や印刷所が休みになることを考えると、その全ページの著者校も、まったく時間の余裕がなく、またしても連日の徹夜仕事になりました。

いくら徹夜には慣れているとはいえ、４週間を超えてほとんど寝ないという、あまりに無茶な仕事を終えたばかりでしたから、肉体よりも精神的に、ほんとうはきつかった。

▼だけれども、ゲラとほぼ同時に送られてきた初版本の実物、その装丁の美しさと潔（いさぎよ）さに励まされて、最後のページまで著者校を終え、修正を入れたゲラを合計６１枚、宿泊先のホテルから版元の扶桑社へファクシミリで送りました。

装丁は、原案こそぼくが提案しましたが、それを見事に仕上げてくださったのは、編集者とプロのスタッフです。

「日中の興亡」（ＰＨＰ）、「王道の日本、覇道の中国、火道の米国」（ＰＨＰ）以来、装丁をたいせつに考えて、原案をぼくが提案するようにしてきました。子供の頃から、本の装丁というものが大好きだったからです。

みなさんも、ネット上で読むだけではなく、本をやはり読みたいのは、手に感じる小さな重みがいいのと、そして装丁のデザイン、訴える志、発色ですよね。

装丁がきっぱり美しいと、嬉しくなる。

「ぼくらの祖国」は、少年少女でも読みやすいように、字と行をゆったり組んでありますが、およそ三百頁あります。

それを、独研（独立総合研究所）の仕事と同時並行で、急ピッチで著者校を仕上げていくのは、また言うけど、きつかったぁ。

しかし、やって良かったのです。

ちょっと信じがたいような校正ミスも見つかりましたから。

校正したなかで、初版を読まれる人にお詫びして訂正しておかねばならない場所を、あらかじめ下記に記しておきます。

p24
（誤）百九十三か国ある（二〇一二年十二月現在）
（正）百九十三か国ある（二〇一一年十二月現在）

p69
（誤）こんなことは書けない、書かないが
（正）以下のことは書かないが

p75
（誤）つい二〇〇〇年の
（正）ついに二〇〇〇年の

p81
（誤）柏崎・刈羽原発
（正）柏崎刈羽原発

p92
（誤）車がやや乱れたで見渡す限り並んで…
（正）車がやや乱れた縦列で見渡す限り並んで…

p102
（誤）四日後
（正）二日後

p106
（ルビの誤り）ひろのちょう
（ルビの訂正）ひろのまち

p170
（誤）一万二千人　※2箇所
（正）一万三千人　※2箇所とも

p197
（誤）立ち尽くして、いると頭の中に
（正）立ち尽くしていると、頭の中に

p223
（誤）栗林忠道大将中将（硫黄島の戦いの最終段階で中将から戦死後に大将に昇進）
（正）栗林忠道大将（硫黄島の戦いの最終段階で中将から大将に昇進）

p224
（誤）中将　※2箇所
（正）大将　※2箇所とも

p259
（誤）国会議員も沈し
（正）国会議員も沈黙し

特に、栗林さん、栗林閣下をめぐる箇所での校正ミスには驚き、すこしショックでした。

これは、ぼくのパソコン上の原稿で消したはずの「中将」という言葉と「戦死後に」という言葉が、出版社に渡った原稿ファイルではなぜか消されていなくて、そのままゲラとして印刷され、出版社の校正でも「大将中将」という不可思議な言葉が見逃されたものです。

最終的には、すべてぼくの責任です。

深くお詫びします。

▼すこし落胆していると、青山千春博士が、いつも通りの平静な口調で「初版本の珍しい値打ちが出て、いいんじゃない？」と言ったので、多少は救われ？ました。

救われてはいけませんね、ごめんなさい。

こんなことを申して恐縮至極ですが、もしも興味のあるひとは、初版と重版を比べてみてください。

ミスを訂正したほかに、ニュアンスを付け加えたところなどがあります。

福島第一原発の所長だった吉田昌郎さんについては、本文中にわずかながら書き加えたところがあり、「重版のためのあとがき」にも、ひとことだけ記しました。